

水の恩人 弘法大師空海

満濃池の大工事を完成させた偉人「弘法大師空海」

■ 空海(くわかい)774年から835年

宝龜5年(774年)に多度郡屏風浦(現在の普通寺市)で誕生した空海は、仏教を志し、遣唐使として中国に渡り、そこで習得した膨大な知識を日本に持ち帰りました。密教を中国からもたらした真言宗の開祖であり、書の大家でもあり、また、日本で最初の庶民のための学校も開校しました。その他、土木・建築・鍼灸・自然科学・医療と、さまざまな分野であふれるばかりの才能を発揮し、その成果のひとつが、満濃池の改修工事でした。大宝年間(701年から704年)に築造されたと伝えられる満濃池は、弘仁9年(818年)に洪水のため決壊。朝廷は築池使(つきいけし)、路ノ真人浜継(みちのみびとはまつぐ)を派遣し復旧に着手しましたが、1年を経ても進まず、いよいよ空海が築池別当(つきいけべっとう)として派遣されることになりました。帰郷した空海は、池の西側にある高台に登り、現地を詳しく調査、復旧計画を立てて工事に取りかかりました。空海の設計は、堤防をアーチ型にし、洪水吐を堅固にするために、岩山を開削したほか、堤防の決壊を防ぐため(水の勢いを減少させるため)水たたきを設置するなど、それまでにはない独創的なものでした。空海のすぐれた技術と彼の人望で集まった多くの人々の力で、わずか3ヶ月足らずの間に周囲2里25町(約8.25km)面積81町歩(約81ha)の大池の復旧工事が完成しました。承和2年(835年)高野山で入定(にゅうじょう)(亡くなること)した空海に弘法大師の号が贈られました。現在、神野寺の門前の小高い場所に満濃池を見守るかのように大師の銅像が立っています。

